
竜の落とし子

森 羅万象

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜の落とし子

【Zコード】

Z5176Q

【作者名】

森 羅万象

【あらすじ】

運命…

あなたは信じますか？

魂は巡る…

あなたは信じますか？

この話を読んで、そんな事を少し考えながら妄想に浸つていただけたらと思います。

ふと田が覚めれば辺りは暗闇に包まれていた。
ビリヤリつた寝をしてしまっていたらしい。

「マイちゃん…まだ帰っていないのか

グルリと周りを見回してみたが、人の気配は無かった。
人の気配は無いものの、どこからか視線を感じる。
その視線がやけに気になりもう一度、今度はゆっくり周りを見回してみた。

すると暗闇の中に光る、丸くて小さな玉が一つ…

「ああ、なんだ、ヤドッちか

何故だか知らないがヤドッちはよく俺を見ている。

無口で何を考えているのかよくわからない不思議な奴だ。

何回か話しかけた事があるが、返事の代わりに頷いたり首を横に振つたりするだけで一度も彼の声を聞いた事が無い。

「ヤドッちもマイちゃん待つてるの？」

そう尋ねてみるとヤドッちは首を横に振った。

そして右手を上げ、クルリと向きを変えて俺に背を向けた。
相変わらずよくわからない奴だ。

背を向けたヤドッちにそれ以上声をかける事なくボーッと彼の背中を見ていると、突然眩しい光に照らされた。

「ただいまーー。」めんね、遅くなっちゃった。ヤス、お腹減つて

ない？

やつとマイちゃんが帰ってきた。時間はもう深夜1時だ。
こんな時間まで誰と居たんだろう?
気になる。

そうそう、自己紹介が遅れたが、俺の名前は「ヤス」。

この家には俺とヤド়っち、そしてマイちゃんの3人で住んでいる。
いや、正確には『マイちゃんに住ませてもらっている』と言ったま
うが正しいだろう。

そり、あれは確か1年ほど前。

大学の授業とかで海に実習に来ていたマイちゃんと俺は出会った。
その時のマイちゃんはとても暗い顔をしていた。

俺と田が合った時に初めて聞いたマイちゃんの言葉は今でもハッキ
リと覚えている。

「あ…康弘…」

俺の名前は『康弘』ではない。

何故いきなり『康弘』と言われたのかは後々知る事になるのだが、
どうやら誰かと俺をダブルさせたようだ。

俺の存在を知つてからマイちゃんは実習の最中も時々グループを抜
けては一人で俺の側に駆け寄つて来てくれて、何を喋るでもなく空
と俺を交互に見ていた。

その瞳は辛さが宿るも優しく澄んでいて、そんなマイちゃんを見て
いると不思議と温かい気持ちになれた。

やがて日が傾き、実習が終わったマイちゃんたちが帰つて行つた。

もう一度と会えないかもしれないと思つと、ギュッと胸が締め付けられた。

マイちゃんは俺に何か伝えたかったんじゃないだろうか…。
いや、俺がマイちゃんに伝えたい事があるよつた気がして、俺はその場から動けずにいた。

いつしか太陽は完全に姿を消し『今度は俺の番だ』とばかりに海を照らす月をぼんやりと眺めていると、向こうから人が近づいて来た。

「よかつた、まだ居てくれたんだね。気になつてき、一度家に帰つたんだけど…戻つて来ちゃつた」

声をかけてきたのはマイちゃんだった。

俺は嬉しかった。

気にしてくれていた事。

そして俺に会いに戻つて来てくれた事。

しかしそれにしても、どうしてこんなに俺の事を気にしてくれるんだろう。

マイちゃんは人間…

俺はタツノオトシゴなのに…。

マイちゃんは持っていたバケツに海水を汲みながら少し言ひにくそうに言つた。

「ねえ…。一緒に…私の家に帰ろ?」

そしてまだ返事もしていない俺をそつと両手で海水ごと掬い上げ、バケツに入れた。

返事をしたとしてもマイちゃんに通じるわけはないのだが、俺はバケツの中で「ありがとう」と呟いた。

どういう訳か俺は人間の言葉が理解できる。

しかし残念ながら人間には俺の言葉が理解できない…と言つよりも、俺の声は人間に聞こえていないようだ。

そんなこんなで会話こそ成り立っていないが、俺に不満は無かつた。それどころか嬉しかった。

マイちゃんの運転する車と一緒に家に向かう途中、俺の事を『康弘』と呼んだ理由を聞かせてくれた。

「少し前に…彼氏だった人がこの世を去つてさ。

原因はね、別れ話の延長の…自殺だったんだ」

そつ語り始めたマイちゃんの目からは大粒の涙がこぼれ落ちていた。

『些細な事でケンカになつて…私、意地張つて自分が悪かつた事も認めずに』『じゃあもう別れよう』って言つたら、彼は『わかつた』って言つて帰っちゃつて。

次の日テレビのニュースで知つたんだ。

私と別れて帰る途中に、車ごと海に飛び込んで自殺して死んじゃつた事…。

彼はよく言つてた。『僕は一人じゃ生きて行けない。僕にはマイが必要だ』って。

『康弘は一人になんかならないよ。私がずっと一緒にいるから』って約束したのに私は大好きだったのに愛してたのに

つまらない意地を張つて彼を絶望させてしまった。

孤独にしてしまった。

私がもつと素直になれたらこんな事に…』

いつの間にかマイちゃんは車をコンビニの駐車場に停め、ハンドルを握つたまま嗚咽混じりに泣きじゃくっていた。

そうか。

だから海で出会つた時にマイちゃんは暗い顔をしていたのか。でも何故、彼と俺がダブルんだろう？

考えたが答えはわからなかつた。

そんな俺の納得しきれない顔を見て、少し落ち着いてきたマイちゃんは言つた。

「彼が言つてたの。『僕はタツノオトシゴだ』って。

意味わかる？

竜の落とし子つてさ、泳ぐのが下手で…何かに掴まつてないと海の流れに流されて生きて行けないんだって

「

その言葉に俺は妙に納得した。

納得したというよりも正に自分そのものだと思つた。

その『何かに掴まる』という行為が産まれた時から誰に教えてもら

うでもなく当たり前過ぎて考えもしなかつたが、いつも海藻に尻尾を巻き付けているから流されずに餌も獲れる。

もし掘む『何か』が無かつたら…

生きて行くのは難しいかもしない。

亡くなつた彼は『マイちゃん』という存在に掘まっていたから生きていたんだろう。

人間も大変なんだな…。

「よし、帰ろう、ヤス。

あなたの名前はヤス…。いいよね?

私の名前はマイ。よろしくね

そう言つてマイちゃんは再び車を走らせ、家へ向かった。

海から水槽へ

マイちゃんの家はワンルームのアパートだった。

バケツの中から部屋の様子を伺うと、少し散らかった部屋の真ん中に小さなテーブルが一つ置かれていて、その上には何やら化粧品らしき物や食べかけのお菓子、パソコンなどが置かれていた。

その横にはベッドがあり、枕元に縫ぐるみが置かれている。よく見るとそれはタツノオトシゴをモチーフにしたキャラクターの縫ぐるみだった。

そういうえばマイちゃんの携帯電話に同じ縫ぐるみと同じキャラクターのストラップが付いていた。

亡くなつた彼を想う気持ちがまだ強く尾を引いているんだろう。

さらじでキヨロキヨロ見回してみると、部屋の片隅に水を張つた水槽が見えた。

「あの水槽ね、さつき授業が終わつて一度帰つた時に用意しといたんだ。

ヤスがあそこで待つててくれる気がしてさ。

ごめんね、ちょっと狭いけど……気に入つてくれるかなあ？」

マイちゃんはそう言いながらバケツを水槽の前まで運んだ。

そしてバケツの中の海水ごと、そつと俺を水槽に放つたその時……フワフワと漂う俺の横を、猛スピードで落下していく石コロに危うくぶつかりそうになつた。

「あれ？ 暗くて気づかなかつたけど、バケツで海水を汲んだ時に一緒に入っちゃつたかな？」

2センチ程の丸い石コロだが、俺にとつてはまるで隕石だ。あんなのが頭にぶつかれば軽いケガでは済まないだろ？

「危ないなあ、もう」

ブツクサ言いながら慌てる俺をマイちゃんは特に気にする様子もなく、水槽の前に座りジッとこっちを見ている。
そして本能のままに掘まるる場所を探すべく、ぎこちない泳ぎでウロウロする俺を見て言った。

「心配いらないよ。ヤスが不安にならないように飾りサンゴや海藻、いつぱい入れといったからね」

確かに掴む場所に不自由する事は無さそうだ。

に尻尾を巻き付けた。

それを見てマイちゃんがこっちを見て微笑んでいる。

彼氏が亡くなる前は…

マイちゃんに寄り添って安心した彼女の顔を、きいたときも、いつでも微笑んで見てたんだろう。

「康弘。ずっと一緒にいようね」

優しい顔でマイちゃんは言った。

その瞬間、俺の体に電気のようなものが走った。

心に初めて生まれた感情だった。

温かくて嬉しい

なんだか少し切ない。

「の氣持ちはどうすればマイちゃんに伝えられるだろ。」

「マイちゃん…」

絞るよつて出した声は届くはずもなく、水槽のガラス越しにただ見つめる事しかできなかつた。

その夜マイちゃんはベッドではなく水槽の前に布団を敷いて寝てくれた。

初めての水槽とこいつ空間で緊張のせいかなか寝つけなかつた俺は、ひたすらマイちゃんの寝顔を見て時間を過ごした。

これからどんな日々が始まるんだろ…。

そんな事を考えながら過ごし、やつと睡魔が襲つてきたのは外が薄らと明るくなつてからだつた。

これがマイちゃんとの出合いだ。

「はーい、遅くなつてめんね。ヤス、ご飯だよー」

おつと、すつかり思ひ出に漫つてしまつていた。

マイちゃんがブラインショリンプの入つた容器とペーパーラットを持ってこつちに來た。

これから待ちに待つた餌の時間だ。

この家に来て一年、マイちゃんはイサザトドモセブラインショリンプ

など、いつも欠かす事なく美味しい餌を用意してくれている。

こまめに水換えもしてくれるし、水槽がちょっと狭い事以外は本当に快適で満足のいく生活だ。

おかげで最近人間で言うところの『メタボ』になってしまった。
泳ぐ時にお腹がジャマをする。

ヤドリガ

マイちゃんがペペシートでブラインショコラを容器から吸い上げ、俺の近くに漂うようにそれを撒いてくれた。

今日の餌も抜群に美味しい。

それは同居してくる彼… セリフ、ヤドリガも回じだつたよつだ。

いつも餌の時間になるとどこからともなくヤドリガが出てくる。ヤドリガはいつもボーッとしているのに、この時ばかりは俊敏だ。

「ヤドリガ、俺たちも一年近づき合ひだしね、そろそろ心許してくんないかなあ？」

黙々と餌を頬張っているヤドリガに声をかけてみた。
するとヤドリガは俺のまつをチラリと見て自分の殻にスッポッと入った。

「あ…石口になつちやつた…」

無愛想なのかシャイなのか知らないが、ヤドリガは話しかけたり機嫌が悪かったりすると時々いつぱり石口のようになる。

そう、あの時も。

初めてマイちゃんの家に来て水槽に移された時に頭上から降つてきた石口は、実は石口ではなくヤドリガだったのだ。

初日は石口だと思つて気にもしてなかつたが、翌朝起きた時に何か違和感を感じた。

寝る前に隣にあつたはずの石口が朝起きたら無くなつていたのだ。俺が寝てこる間にマイちゃんが水槽から出した様子もなかつた。

不思議に思つてみると、次の田口ロロが飾りサンゴの隙間にあるのを見付けた。

しかもよく見るとガタガタ動いている。

恐る恐る近付いてみると、それは飾りサンゴの隙間にハマつて動けなくなつてもがいでいるヤドカリだった。

何とか救出しようとしたが、押しても引いてもピクリともしない。

「なにこれ、石口ロロじゃなくてヤドカリをさ~ふふ…ヤス、お友達がいて良かつたね」

非力ながらもヤドカリの救出に励んでいた俺を見てマイちゃんがそう言った。

そして指先でいとも簡単にヤドカリを救出すると手のひらに乗せて

「ここに来たのも何かの縁ね。じゃあ君の名前は…
うーん…えーっと…ヤドリ」

と即座に何のひねりもない名前をつけたのだった。

ヤドリちは嬉しかったようで、マイちゃんの手のひらの上で両腕を上げ、ブンブン振り回していた。

それからといつもの俺とヤドリは、特に干渉し合ひ事なく寝食を共にしている。

今はまだ俺に心を開いてくれてないようだが、いつかお互の未来を語り合えるような仲になりたいもんだ。

ヤドリちも俺と同じように思つてくれているといいのだが、なにせ一年間この調子だから、まだまだ先は長そうだ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5176q/>

竜の落とし子

2011年2月19日14時30分発行